

54 集学的治療により比較的長期生存が得られた癌性髄膜炎の1例

上田 佳史・新井 良和・半田 裕二
竹内 浩明・中島 毅・橋本 智哉
久保田紀彦・前田 浩幸*・石田 誠*
山口 明夫*

福井医科大学脳神経外科
同 第一外科*

癌性髄膜炎を来す原発巣としては乳癌・肺癌が多く、組織型としては adenocarcinoma が多いと報告されている。乳癌で癌性髄膜炎となる頻度は1～5%である。乳癌の癌性髄膜炎例の予後は非常に悪く、平均生存期間は1.5～7.2ヶ月である。今回我々は、乳癌の外科的治療後、癌性髄膜炎を発症し methotrexate (MTX) の髄腔内投与、放射線療法、全身化学療法を併用し比較的長期生存が得られた1例を経験したので報告する。

症例は53歳の女性。平成12年9月、右乳癌にて右乳房切除術施行。腋下リンパ節・肋骨への転移があり、病理診断は adenocarcinoma であった。外科外来で全身化学療法 (docetaxel; 55～60 mg/1～2 weeks; div), 抗癌剤内服 (TAM: クエン酸タモキシフェン; 20mg/day) にて継続加療されていた。平成13年4月頃より頭痛・嘔吐が出現し、腰椎穿刺の細胞診で腺癌細胞が認められ癌性髄膜炎の診断で当科紹介入院となった。頭部・脊椎のCT・MRIでは明らかな病変は認められなかった。入院後、週に1度のMTX (10mg) 髄腔内投与を3回、これに引き続き全脳全脊髄照射 (total 40Gy) を施行した。頭痛・吐気は軽快し自宅退院できた。この後、当科によるMTX 髄腔内投与、外科による全身化学療法が継続され、この間、髄液細胞診は常に陽性所見を認めたものの、MRI上は脳脊髄に明らかな病変を認めなかった。癌性髄膜炎の発症から約18ヶ月の経過で死亡した。

55 Dynamic MRI が診断に有用であった ganglioglioma の3例

生沼 雅博・佐久間 潤・鈴木 恭一
松本 正人・佐々木達也・児玉南海雄
福島県立医科大学脳神経外科

【目的】我々はこれまでに field echo method を用いた dynamic MRI が脳腫瘍の鑑別診断に有用であることを報告してきた。今回、術前診断に dynamic MRI が有用であった ganglioglioma の3例について画像所見を中心に報告する。

〔症例1〕17才、男性。側頭葉てんかんにて発症。右側頭葉に、T1WIにてiso, T2WIにてhigh, Gdにて強く造影される腫瘍陰影を認めた。Dynamic MRIにおける signal intensity ratio は約1分で急速に上昇し、その後5分間徐々に上昇するパターンを呈していた。開頭腫瘍摘出術を施行し、病理診断は ganglioglioma であった。

〔症例2〕19才、男性。側頭葉てんかんにて発症。左側頭葉に cyst を伴う腫瘍を認めた。腫瘍部分はT1WIにてiso, T2WIにてhigh, Gdにて造影された。Dynamic MRIはcase 1に類似していたため、gangliogliomaの術前診断で手術を施行し、病理診断は ganglioglioma であった。

〔症例3〕1才6ヶ月、女児。急性水頭症にて発症。右小脳に主座を有し、テント上下にまたがるT1WIにてiso, T2WIにてhighな腫瘍を認めた。Dynamic MRIはcase 1に非常に類似していたため、gangliogliomaの術前診断で手術を施行し、病理診断は ganglioglioma であった。

【結語】術前の鑑別診断に dynamic MRI が有用であった ganglioglioma の3例を報告した。

56 Atypical teratoid/rhabdoid tumor の2例

高畠 靖志・宇野 英一・若松 弘一
山崎 法明・土屋 良武・加藤 英治*
藤沢 弘範**

福井県済生会病院脳神経外科
同 小児科*
金沢大学脳神経外科**

〔症例1〕7ヶ月、女児。嘔吐・意識障害で発症。